



## オー・ド・カニユの思い出

望月正男

コート・ダ・ジュールを訪れたのはヴァカンスの人波に先がけて4月中旬から5月にかけてであった。マドリードを発ち武骨な山骨が夕陽に映えるピレネーを越えて午後8時すぎニースの空港についた。乗客の殆んどがニース行きの人達でたちまちタクシーにおさまったが、離れているオー・ド・カニユへは運転手が仲々応じてくれない。やっと交渉がまとまったところ、フランス人のマダムが私もカニユへ行くのだからと同乗することになって夜の海岸を走った。途々家内に古城の説明をしたり、日本の生活を聞いたりして話はずんだ。オー・ド・カニユのホテルのマダムはイーゼルのある7坪程の感じよい部屋に案内してくれた。小高い丘の頂にある古いシャトーをかなめに美しいさび朱の瓦屋根の建物が古壁を豊積して丘をつつんでいる。シャトーの広場からは高く伸びる糸杉や色鮮やかなふじやばらなどで彩どった民家のかたまりを眼下に、谷をへだてて南吹の青い空に凄量感のアルプス連峰が眺望される。空気が澄んで実に鮮明である。斜面に沿って曲折する石畳の道を散策するとオレンジの梢ごとにエメラルドグリーン豊かな地中海がのびて強い風景をつくっている。この丘を下ってルノアール通りを行くと嘗てのルノアールの家がある。しなやかな枝をゆったりとささえたオリヴィエヤバルミエの茂る広

い庭園があって紫と白のあやめが道ばた一面に美しく5月には開くというバラがたくさん蕾をもっていた。その庭に2階建の大きな石造の家が保存されている。画室は大小二つあって遺作や遺品とともに嘗て使用した車椅子などそのままのこされ、晩年のルノアールを偲ばれる。訪れる人も少いこの庭では車や人混みから解放されて制作することが出来た。そして豊麗で誠実なルノアールの写実に感激した。

ホテルのすぐ近くに計らずも青山義雄先生のアトリエがあって制作をしていられ、私達を親しく迎えて下さった。ある1日先生の車でマチスの礼拝堂を見に出かけた。かって上野のマチス展でみたそのエスキスを思い出しながらアルプスの山麓を走りヴァンスに向った。堂内の壁には描線で描いた十字架への道や花のマリヤなどが白タイルに焼付けられている。特にざん悔室へ通ずる純白の扉は背景に淡紫色の空間をのぞかせ不定形のすかし模様微妙に変化してバランスを保っている。傑作であろう。白く明るい壁や床にヴィトローから輝く青黄緑の投影が清澄に響きあって体の中に溶けこすで行く思いであった。帰路、近代の美術の秘密を考えながら、北部フランスの壮大な寺院を尋ね、中世美術の崇高な感激に浸って来た私は古寺に郷愁を感じるのはどうしたことであろうか。

かぐらちと 洋画材料

野田でございます

札幌・狸小路2・TEL (23)2203・工場 (24)6923